



和's YAMATO (わずやまと)

2023
夏号

- 写真で楽しむ群馬の自然
「ユウスゲと榛名山」
- 暮らしを支える水道施設紹介
「深谷市血沼浄水場」
- シリーズ群馬の芸術家
令和四年度企業メセナ群馬
芸術文化奨励賞受賞者紹介
- 郷土史跡めぐり「南下古墳群」
- 第五回 本能寺の変と伊賀越え
- 第四回 築山殿事件
- 徳川家康を襲う数々の危機



「ヤマツツジと舞う」下6号 須藤和之画
ヤマトビオトープ園にて

写真で楽しむ 群馬の自然



ユウスゲと榛名山

群馬県立榛名公園ビジターセンター
高崎市榛名湖町 845

上毛三山の一つ、榛名山に夏が訪れる7月から8月にかけて、ユウスゲの花が見頃となります。ユウスゲはユリ科の多年草で、花は夕方から翌朝にかけて咲き誇ります。群馬県立榛名公園内に「ユウスゲの道」という榛名高原を1周するハイキングコースがあり、夏の観光シーズンには可憐な黄色の花々を楽しむことができます。

撮影 藤重 朋紀 氏
略歴 1952群馬県利根郡みなかみ町生まれ 1979 コマーシャルフォトスタジオ創美社入社
2001 フリー
1971 群馬県立渋川高等学校卒業 2010 写真集「上州路・一本桜」
1972 東京写真専門学校中退 2011 写真集「上州路」

須藤 和之 Kazuyuki sutoh プロフィール PROFILE

表紙の絵「ヤマツツジと舞う」

1981年 群馬県前橋市生まれ
2005年 多摩美術大学絵画学科日本画専攻卒業 2007年 東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復日本画修了 2010年 同大学大学院 保存修復日本画博士課程修了 博士号取得 博士審査展 お仏壇のはせがわ賞特別賞 個展(画廊翠轡)(同2011～20) 2011年 中央電機商会カレンダー原画(2011～21) 2013年 アーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ・未来への対話」出品、群馬銀行創立80周年記念 収蔵作品「群馬の四季」制作、慶應義塾大学非常勤講師(2013-2020) 2014年 個展(日本橋三越本店) (同2017,20) 2017年 群馬県展 県知事賞 2016年 個展(株式会社ヤマト) 2019年 高崎市タワー美術館トップランナーⅢ出品 2020年 上毛芸術奨励賞受賞 2022年 個展(株式会社ヤマト) 現在 日本美術院院友
OFFICIAL WEBSITE:SUTOOO.NET URL: <http://sutoooo.net/>



和's YAMATO (わずやまと) 夏号 2023 (第57号)

【和's yamato】の由来

ヤマトの漢字の「和」、Water&Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。

和's YAMATO 夏号 2023年(令和5年) 6月発行

発行:株式会社ヤマト(広報室)群馬県前橋市古市町118 tel:027-290-1891 fax:027-290-1896

建設プロダクト ヤマト

株式会社ヤマト 群馬県前橋市古市町118 〒371-0844 TEL.027-290-1800(代) FAX.027-290-1896

支店/東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北 営業所/軽井沢、伊勢崎、神奈川県央、茨城、太田、東松山、新潟、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀、青森
附属施設/大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、朝倉工場、教育センター、コンタクトセンター、サポートセンター、プロダクトセンター
ヤマトホームページ <https://www.yamato-se.co.jp/>



徳川家康を襲う数々の危機

監修…歴史家・文学博士 安藤優一郎氏 文・写真…木下直也

第四回



築山殿事件

徳川家康は戦国時代を終わらせ、泰平の世・江戸を開いた英傑です。しかし、その70余年にわたる生涯は、度重なる危機の連続でした。家康が徳川幕府を開くに至るまでに直面した数々の危機に着目し、絶体絶命の窮地をどのように乗り越えていったかを紹介します。

天正3年（1575）、家康は長篠の戦いで武田軍に勝利したものの、武田軍との戦いは続いていた。三河・遠江の一部は家康が支配していたが、実際には両国とも武田氏と激しい争奪戦を繰り広げており、完全に掌握していたとはいえない状況だった。膠着状態の中、武田勝頼は家康の妻・瀬名（築山殿）に調略を仕掛けており、瀬名は徳川軍の機密を勝頼に内通していたと疑われる。家康が浜松に在る間、瀬名は岡崎に滞在しており、家康の目が届かなかったため、勝頼に付け入る隙を与えてしまったのかもしれない。内通の真偽は定かでは

ないが、瀬名は、武田氏との抗争に敗れば、徳川家の存続が危ぶまれると考え、勝頼の調略に乗ってしまった可能性もある。瀬名だけでなく、嫡男の信康にも内通の嫌疑がかかっていた。しかもその内通疑惑が、信長に知られてしまう。天正4年（1576）頃、信康とその妻・五徳姫は不和になり、天正7年に五徳姫は、父の信長に瀬名と信康が武田方と通じていた疑いがあることを暴露する。徳川家は織田家に従属する大名であったため、信長と敵対する武田氏に妻と嫡男が通じていたとすれば、信長に対する背信行為となることを危



浜松城

写真提供：浜松・浜名湖ツーリズムビューロー



二俣城跡（静岡県浜松市）

写真提供：浜松・浜名湖ツーリズムビューロー

信康が悲劇の切腹を遂げた場所。天竜川と二俣川に挟まれた難攻不落の山城で、家康と武田信玄・勝頼親子とがこの城を巡って激しい攻防を繰り広げた。

若き日の徳川家康像（浜松城内）

植物のシダの葉の形をした、兜の前に立てる前立（まえたち）を手に入れている。昭和56年建立。



写真提供：浜松・浜名湖ツーリズムビューロー

惧し、家康は二人の処罰を考える。

家康は天正7年（1579）8月に信康を岡崎城から追放し、遠江領国内の城に幽閉した。築山殿は信康が幽閉された後、岡崎から浜松に移送される途中で殺害された。信康は同年9月に遠江の二俣城で切腹した。これは家康の命令があったとされている。

築山殿と信康の死は、家康と信康が武田氏への対応で対立し、家康の主導で二人を殺害したとする説もある。家康は長篠の戦いで武田氏に大勝したにも関わらず、武田氏との戦いは3年にもわたり決着しなかったことは、徳川家中が一枚岩でなかったことが遠因と考えることもできる。

武田氏の滅亡

天正10年（1582）2月1日、信玄の娘婿で信濃国福島城主の木曾義昌が信長の調略によって武田氏から離反し、勝頼は義昌を討つため挙兵したが、これが引き金となって信長の武田氏討伐が開始された。織田勢は信濃、徳川勢は駿河、北条勢は駿河、上野に侵攻し、勝頼は織田方の攻撃から逃れ

るため、居城の甲斐新府城を出て山間部の甲斐都留郡・岩殿城に籠城し抗戦しようとした。しかし、岩殿城主の小山田信茂の離反により入城できず、織田方に追いつかれ自害、ここに武田氏は滅亡した。

武田氏を滅ぼした信長は、武田氏の所領だった甲斐、信濃、上野を領有し、家康は駿河を得た。一方、北条氏には信長から恩賞が与えられず、不満がくすぶったが、信長の軍事力の前に屈服するしかなかった。

太刀洗の池跡（静岡県浜松市）



写真提供：浜松・浜名湖ツーリズムビューロー

築山殿を切った刀を洗った池があった場所で、池の水が100年近く赤く染まったとの伝説が残る。

第五回



本能寺の変と伊賀越え

天正10年（1582）6月2日の未明、天下統一を目前にしていた織田信長が明智光秀の急襲を受けて自害した「本能寺の変」が起こる。この急報を家康が受けたのは、京から和泉国堺（現在の大阪府堺市）に立ち寄り、滞在中のことだった。光秀は大軍で本能寺を包囲しており、軍隊を伴っていない家康が至近距離の堺に留まっていたら、光秀の大軍に攻め込まれてしまうと考えると、家康は急きょ本国の三河に戻ることを決めた。三河に通じる主要街道の要所は、光秀軍に抑えられていることが予想され、通行することができないため、山間部の間道を使うことになった。しかし、山間部の道も武装した地侍や土豪が襲ってくる可能性が高く、危険極まりない。この逃避行が、のちに「神君伊賀越え」と呼ばれるようになった。

家康に本能寺の変を急報したのは、

茶屋四郎次郎清延だったという説がある。家康は関西の拠点に情報網を作っており、異変が発生した時にはその情報が入り、速やかに届くように手はずを取っていた。家康は家臣の本多忠勝にこの情報を確認させると、「伊賀越え」を決行するが、その際にも家康一行を先導したのも茶屋四郎次郎であったという。茶屋は、地侍や野武士などに金を配って、家康の伊賀越えを支援したといわれている。

また、伊賀越えの際には、伊賀出身の家臣・服部半蔵が集めた伊賀・甲賀の忍者組織が一行を警護したともいわれている。家康は堺を立て2日後の6月4日に本国の三河に着いたとする記録が残っている。家康らと別の伊賀越えルートを通った穴山梅雪は、落ち武者狩りに遭い落命したので、伊賀越えはまさに命がけだった。

伊賀越えの経路

（諸説あり）



徳永寺（三重県伊賀市）



大浜稲荷社（愛媛県南市）

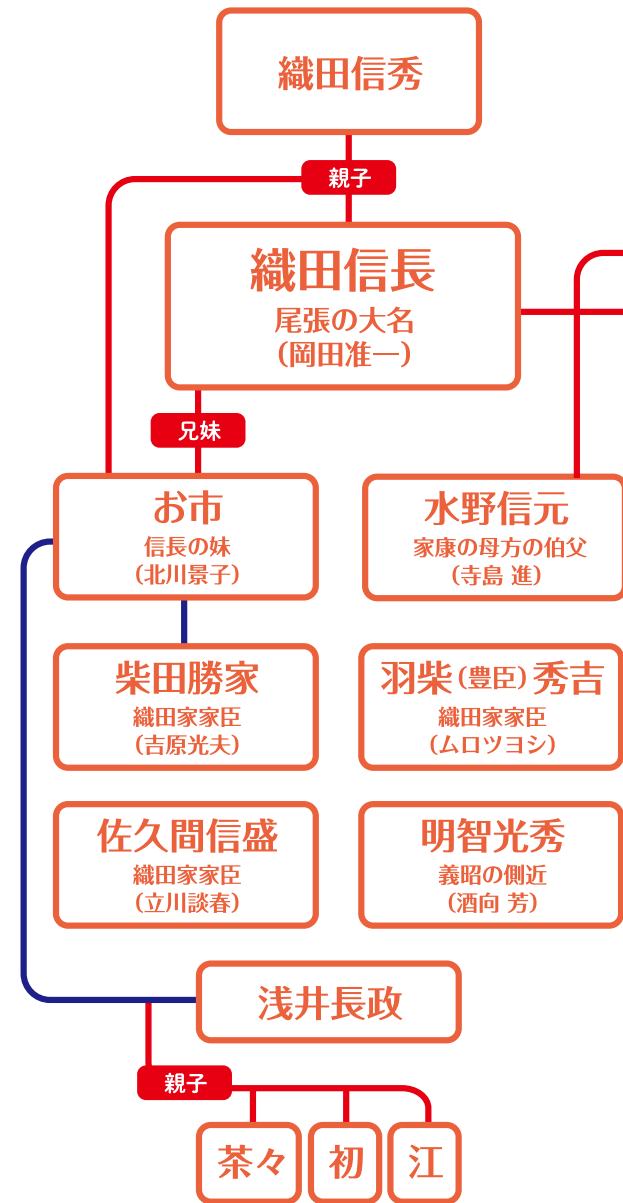
神君伊賀越え三河上陸地
天正10年（1582）6月4日頃、家康一行は伊勢の白子から船で三河に向けて海を渡り、当時は海岸沿いにあった大浜稲荷社付近に上陸し、家臣の松平家忠らが迎えに来るのを待ち、岡崎に向かいました。
（参考資料：大浜稲荷社案内板）

徳川家康関係年表

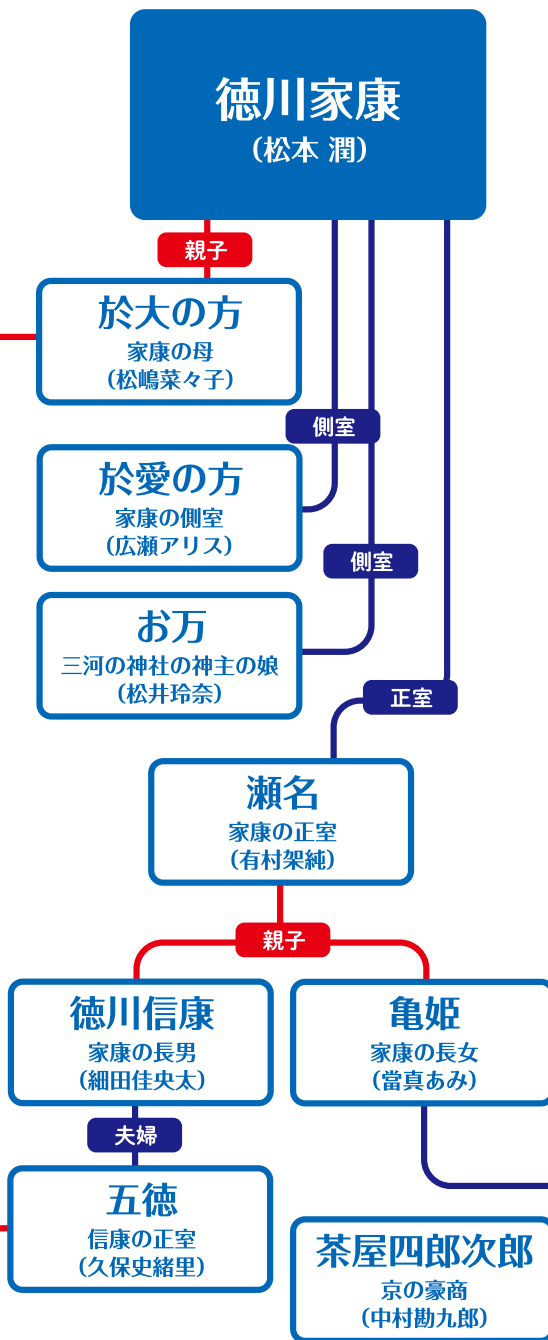
年月	年齢	事項
元亀 元年(1570) 6月	29才	居城を浜松に移す。
10月		上杉謙信と同盟締結。
3年(1572) 10/3	31才	信玄、駿河から遠江の徳川領に攻め入り諸城を陥落。別動隊は三河侵攻。浜松城を出撃した徳川勢、三方が原で惨敗。
12/22		信玄病没。
天正 元年(1573) 4/12	32才	足利義昭、信長に降伏。室町幕府滅亡。
7/18		朝倉氏滅亡。
8/20		浅井氏滅亡。
8/28		三河長篠城奪還。
9月		武田勝頼、遠江高天神城を奪取。
2年(1574) 6月	33才	武田勢、三河足助城を奪取。家康を三河吉田城に追い込む。
3年(1575) 4月	34才	長篠城を包囲するも、織田・徳川連合軍に惨敗。家康、武田勢に奪取された遠江諸城の奪還を開始。
5/21		正室築山殿を殺害。嫡男信康に自害を命ず。
		高天神城を奪還して遠江平定。
7年(1579) 8/29	38才	浜松城を出陣して駿河の武田領に攻め入る。2/21、駿府に入る。
9年(1581) 9/15	40才	織田勢に追い詰められた武田勝頼自刃。武田氏滅亡。
10年(1582) 2/18	41才	信長より駿河国を与えられる。
3/11		信長、安土城凱旋。
3/29		戦勝を祝するため安土城に赴く。
4/21		逗留中の和泉国堺で本能寺の変を知る。
5/15		伊賀越えにより岡崎に戻る。
6/2		羽柴秀吉、山崎の戦いで明智光秀を破る。
6/4		尾張鳴海まで兵を進めるも、秀吉からの報せを受けて浜松城に戻る〜甲斐侵攻を開始。
6/13		家康、甲府に入る。
6/19		対陣中の北条勢を黒駒で破る。
7/9		北条勢と和睦。同盟関係となる。
8/12		浜松城に戻る。
10月末		秀吉、賤ヶ岳で柴田勝家を破る。
11年(1583) 4/19	42才	勝家自害。
4/24		岐阜城主織田信孝自害。伊勢長島城主滝川一益降伏。
5月		家康次女督姫、北条氏直に嫁ぐ。
8月		秀吉、大坂城築城工事開始。
9/1		家康・織田信雄連合軍、秀吉軍を長久手の戦いで破る。
12年(1584) 4/9	43才	秀吉と信雄、和睦する。
11/12		秀吉、関白就任。
13年(1585) 7/11	44才	徳川勢、上田城主真田昌幸に敗れる。
8/2		家康と北条氏、起請文を交して同盟を強化。
10/28		石川数正、出奔。
11/13		天正大地震。
11/29		信雄、秀吉への臣従を説得。
14年(1586) 1/24	45才	秀吉、家康赦免。
2/8		家康、北条領の伊豆三島で氏政と対面。
3/9		駿河三枚橋城で再び対面。
3/11		大坂城で秀吉に拝謁。
10/27		居城を駿府に移す。
12/4		秀吉、九州攻めのため大坂城出陣。
15年(1587) 3/1	46才	島津氏降伏。
5/8		家康、氏政・氏直父子に起請文を送って上洛を強く求める。
16年(1588) 5/21	47才	上洛した北条氏規、秀吉に聚楽第で拝謁。
8/22		北条氏、上野国沼田・吾妻領に関する秀吉の裁定に従う。
17年(1589) 6月	48才	真田昌幸、北条氏に沼田・吾妻領の三分の二を引き渡す。
7月		北条勢、真田領の名胡桃城奪取。
11/3		家康、駿府城出陣。
18年(1590) 2/10	49才	秀吉、京都出陣。
3/1		秀吉軍、山中城を陥落させる。
3/29		徳川勢、小田原城近くに陣を構える。
4/4		家康と信雄による開城交渉開始。
6/6		北条氏降伏。
7/5		氏政たち切腹。
7/11		秀吉、小田原城入城。
7/13		



織田家



徳川家



家臣団

酒井忠次 (左衛門尉) 徳川家家臣 (大森南朋)	榊原康政 (小平太) 徳川家家臣 (杉野遥亮)
石川数正 徳川家家臣 (松重 豊)	本多正信 徳川家家臣 (松山ケンイチ)
井伊直政 (万千代) 徳川家家臣 (板垣李光人)	本多忠勝 (平八郎) 徳川家家臣 (山田裕貴)
鳥居元忠 (彦右衛門) 徳川家家臣 (音尾琢真)	大久保忠世 徳川家家臣 (小手伸也)
服部半蔵 (正成) 徳川家家臣 (山田孝之)	平岩親吉 (七之助) 徳川家家臣 (岡部 大)
大鼠 服部党の忍び (松本まりか)	鳥居強右衛門 奥平家家臣 (岡崎体育)
	奥平信昌 奥三河の武將 (白洲 迅)

忍び

岡崎勢

大岡弥四郎 信康の家臣 (毎熊克哉)
山田八蔵 信康の家臣 (米本学仁)

足利義昭
室町幕府 15 代将軍
(古田新太)

武田家



武田家から離反

今川家

今川義元

親子

今川氏真
今川義元の嫡男
(溝端淳平)

夫婦

糸
今川氏真の正室
(志田未来)

南下古墳群

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 専門員(主任) 今城 未知

3世紀半ば～7世紀までの古墳時代において、6世紀～7世紀は後期・終末期と呼ばれます。前方後円墳に代表される古墳時代ですが、後期・終末期には前方後円墳の築造は次第に下火となり、円墳や方墳が多く造られます。また、埋葬施設にも大きな転換が見られます。古墳時代が始まって以来、埋葬施設は竪穴系の埋葬施設でしたが、後期からは横穴式石室が採用されます。今回は、6世紀後半～7世紀にかけて造営された南下古墳群を紹介します。

南下古墳群は、榛名山東麓の小丘陵の斜面地に立地します。かつて、南下古墳群とその周辺には100基以上の古墳があったことが分かっています。そのほとんどは現存していませんが、南下古墳群では6基の古墳が町史跡に指定され、史跡公園内に保存されています。

南下C号墳は、丘陵の一番高い場所に築造された直径15m、高さ約4mの円墳で、6世紀中葉～後半の築造と考えられています。石室は古くから開口していたようで、副葬品などは不

明ですが、古墳の周辺から円筒埴輪が採集されていることから、埴輪が並べられていた可能性があります。C号墳の横穴式石室は自然石乱石積で東向に開口しています。横穴式石室は南に向けて開口していることが多いので、珍しい例と言えます。

南下D号墳は直径13m、高さ3mほどの規模と考えられています。乱石積の横穴式石室は南西方向に開口しています。石室の構築技術がC号墳に近く、埴輪が確認されていないため、7世紀前半の築造と考えられています。

南下B号墳は南下古墳群の最も東に位置し、直径30m、高さ6m、7世紀中頃に造られた円墳です。この古墳の石室には3つの特徴があります。二目は玄室の天井がとても高いことです。先に紹介した南下C号墳は、遺体を安置する部屋である玄室と、玄室まで続く通路である羨道の高さがあまり変わりません。ところがB号墳の羨道高は現状で約1.2m、玄室高約3mです。羨道は土砂で埋まっている部分もあるため実際はもう少し高いですが、玄

室天井の高さが際立ちます。羨道の天井より玄室の天井が高い構造は近畿地方や九州地方でよく見られる構造です。B号墳の石室は特に畿内の石室と類似しています。二目は玄室の石材の間に漆喰が充填されていることです。

石室に漆喰の充填や塗布が確認されている例は全国的に見ても非常に少なく、畿内の終末期の有力古墳に見られます。県内では前橋市総社古墳群の宝塔山古墳・蛇穴山古墳、高崎市山ノ上古墳で確認されています。三目は玄室を構成している石材の一部に、切組手法が見られることです。切組手法とは、石材の角をL字に加工して組み合わせて積み上げる手法です。これにより石材同士がしっかりと噛み合い、構造を安定させることができます。

南下A号墳は7世紀後半に造られた直径約20×27m、高さ4mの円墳です。A号墳の石室は羨道が長く、B号墳と同じく羨道に比べて玄室の天井が高い構造をしています。A号墳ではB号墳よりも切組手法を多用し、石材を精緻に加工して石室を構築しています。群馬県中・西部の有力古墳にはA・E号墳のように精緻に加工した石材を切組積みで構築した石室があります。群馬県では「きりしきりくみづみせ截石切組積石室」と呼ばれる石室ですが、総社宝塔山古墳・蛇穴山古墳を頂点として、限られた有力古墳にのみに見られます。また、A号墳の石室は漆喰の痕跡の他に、石材加工や石室構築の際の目印と考えられる朱線が見られます。現代の大工

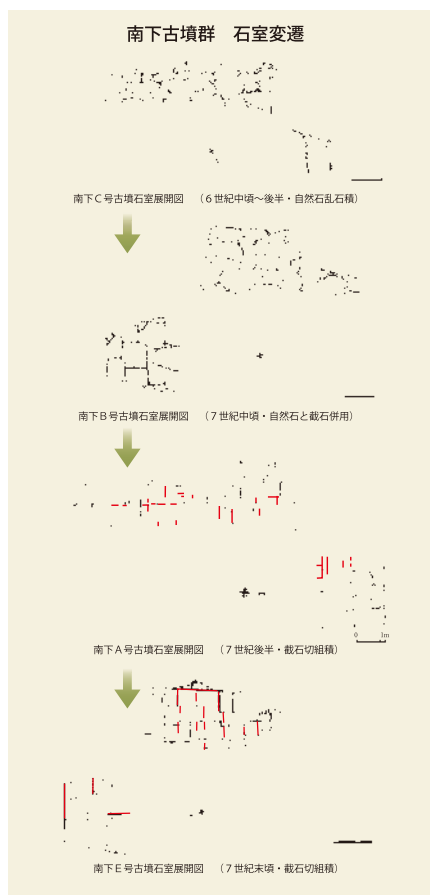
さんも木材加工や建築の際には資材に目印を設けます。古墳時代の石室工人たちも同じような作業をしていたと考えられますが、基準線が残っているのは全国的に見ても非常に珍しい例です。

南下E号墳は7世紀末頃に築造された直径約17m、高さ約2mの円墳又は方墳です。南西に開口する横穴式石室は、A・B号墳と同じく高い玄室天井で、A号古墳と同じく切組手法を多用し、壁面には朱線が見られます。

南下古墳群の石室を年代順に見ていくと、時期が新しくなるにつれて構築技術が洗練され、B号墳以降は総社古墳群や畿内との関連性が窺えることが分かります。総社古墳群は古墳時代から古代の律令社会へ移行していく段階で畿内勢力と強く結びついていました。横穴式石室に総社古墳群との関連性がある南下古墳群の被葬者たちは、総社古墳群の被葬者たちを支える勢力だったと考えられています。

今回紹介した南下古墳群の石室は、安全管理のために石室への立ち入りが制限されていますが、古墳群に隣接している吉岡町文化財センターの展示室やセンターのY o u , T u b eチャンネルでは、解説付きの動画を見ることが出来ます。展示室は午前9時～午後4時に見学できます。

(月曜日休館 月曜が祝日の場合は翌日が振替休館)
(写真図版は吉岡町教育委員会提供)



南下古墳群石室変遷



A号墳石室内写真



C号墳石室内写真



南下E号墳の赤色作業線



上空からの古墳群

上野瑞香・牛嶋直子・吉村浩美

美術研究家 染谷 滋

公益社団法人 企業メセナ群馬とは

メセナとはフランス語で芸術文化への支援活動を意味し、元々は古代ローマの政治家ガイウス・マエケナスのフランス語読みメセーナに由来する。マエケナスはローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスの側近で、芸術家のパトロンとして著名な人物。ラテン文学の代表的詩人ウエルギリウス（英語名バージル）の『農耕詩』はマエケナスへの献辞で始まる。

芸術を愛し、文化を育てたマエケナス（メセーナ）の精神を受け継ぎ、欧米では早くから企業による芸術文化支援活動が活発だったが、日本でも一九九〇（平成二）年二月、当時資生堂の社長だった福原義春を会長に企業メセナ協議会が発足している（現会長はS O M P Oホールディングス特別顧問の二宮雅也）。

群馬県でもこの企業メセナ協議会の発足にいち早く呼応し、同年二月に企業メセナ群馬を発足させた。これは全国的に見ても早い例である。当時の会長は桐生瓦斯（株）社長の塚越平人、理事長に（株）マエダスタジオ社長の前田勇、実務を取り

仕切った専務理事がセントポールギャラリー社長の竹内嘉一だった。

発足以来三〇年を超えた企業メセナ群馬の活動の柱が芸術文化奨励賞の授与で、昨年度は美術分野で三名、音楽の分野に一名が選ばれている。

企業メセナ群馬の正会員でもある（株）ヤマトは、これまでも芸術文化奨励賞を受賞した作家、ましもゆきや渡辺香奈の展覧会を積極的に開催してきたが、この秋には昨年度美術分野の受賞者三名を一堂に会した展覧会を開催する。今回はこの三名を紹介したいと思う。

日本画の色彩に魅せられて

— 上野瑞香

富岡市に生まれた上野瑞香は、二〇〇〇年に東京藝術大学美術学部絵画科の日本画専攻を卒業、同大学の大学院に進み二〇〇二年に修了している。二〇〇五年三月、郷里の実家にアトリエU・Eが完成。そこを拠点とした活動が今日まで続いている。

日本画の岩絵の具の魅力に惹かれ、その色彩を表現することに力を注いできた。二〇〇三年のインタビュー記事では、「私は物を色でとらえる。物を立体としてとらえる油絵と違い、そこが日本画に向いていた」と語っている。

植物をテーマに描くことが多く、必ず登場するのが小さな赤いアリである。大学の卒業制作から描かれているこのアリは、今ではすっかり上野のトレードマークになっている。赤で描く理由は、「リアル過ぎないこと、目立とうとしている色であること」と説明しているが、小品では目立つこの赤いアリも、様々な色彩が散りばめられた植物の大作ではそれほど目立たないから、作品の印象を損なうものではない。

上野にとってアリは、自分の作品を肯定するものであり、身近で小さな世界を描き続けることへの決意でもあるのだろう。

二〇二年には富岡市立美術館で「上野瑞香 日本画展—アリな世界—」展が開かれた。個展もコンスタントに行われ、高崎の広瀬画廊で二〇〇六年から二二年まで毎年、高崎高島屋では二〇二

年からほぼ隔年のペースで開かれている。高崎市タワー美術館でも様々な機会に作品が紹介され、同館をはじめとして県内各地で日本画のワークショップも頻繁に行っている。

二〇一九年には日本画の新世代を紹介する山種美術館日本画アワードに入選。さらに二〇二二年には、千住博が企画する第二回三越伊勢丹・日本画大賞展にも入選して全国的な注目を集めるようになった。

闇に光る郷愁の風景

— 牛嶋直子

前橋市に生まれた牛嶋直子は、二〇〇六年に女子美術大学芸術学部絵画学科の日本画専攻を卒業、同大学の大学院に進み二〇〇八年に修了している。

東京から帰京する際、夜の電車から見える風景は都心を離れるにつれて暗くなり、目に留まったのはビニールハウスの灯りだった。これが作画のモチーフとなつて、暗闇の中に光を発する独特の風景画が生まれた。モチーフはビニールハウスだけでなく、ガソリンスタンドや遊園地、テニスコートなど様々に展開したが、だれが見ても牛嶋と分かるスタイルを確立した。

東京と前橋の画廊で個展発表を続け、二〇二二年には第五回東山魁夷記念・日経日本画大賞展



上野瑞香 庭

上野瑞香 MIZUKA UENO

略歴

- 1974 富岡市に生まれる
- 2000 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業
- 2002 同大学院美術研究科修士課程絵画専攻日本画修了
- 2005 富岡にアトリエU・E開設、毎年企画展「グループ展 富岡市立美術館上野瑞香日本画展—アリな世界—」
- 2019 山種美術館日本画アワード
— 未来をになう日本画新世代—入選
- 2022 第2回三越伊勢丹・日本画大賞展 入選
- 2023 第2回三越伊勢丹・日本画大賞選拔展
- このほか、広瀬画廊（高崎）、あらかわ画廊（京橋）、高崎高島屋など、グループ展も多数。富岡市立美術館「郷土の作家展」、高崎市タワー美術館の企画展などに複数回出品。

牛嶋直子 NAOKO USHIJIMA

略歴

- 1979 前橋市に生まれる
- 2006 女子美術大学芸術学部絵画学科日本画専攻卒業
- 2008 同大学院美術研究科日本画研究領域修了
- 2012 上野の森美術館 第5回東山魁夷記念・日経日本画大賞展 入選
- 国立新美術館 シェル美術館 入選
- 2013 アーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ」
- 2015 国立新美術館 シェル美術館 入選
アーティストセレクション
- 2020 群馬県立近代美術館 絵画のミカタ
- このほか、画廊翠巒（前橋）、ギャラリーアートもりもと（銀座）、ギャラリーグラフィカ（銀座）、Yagins（前橋）などで個展。グループ展も多数。グランレジデンシア高崎、白井屋ホテルに作品常設。



牛嶋直子 Play in the woods

中では「記憶の中の風景」というテーマで一貫しているようだ。

光を放つ闇の中の木々や宝石のようなさまざまな物体、その中には作者の化身に違いのない人形のようなオブジェも登場し、見る者を飽きさせない。

二〇二〇年には群馬県立近代美術館での「絵画のミカタ」展に出品した五人のアーティストのひとりに選ばれたが、同年高崎に誕生したマンション「グランレジンシア高崎」や、前橋の老舗旅館を大胆に改装した「白井屋ホテル」にも多数の作品を提供している。

古典技法に生命を込めて

— 吉村浩美

松井田町に生れた吉村浩美は、高校卒業後地元企業に就職したが、通信教育で美術を学ぶ中で彫刻の面白さに魅了され、基礎からやり直そうと、一

九九六年に東京学芸大学教育学部芸術課程美術科の彫刻選修を卒業、東京藝術大学大学院に進み一九九九年文化財保存学専攻を修了した。

乾漆という古典技法で立体やレリーフを制作、モチーフは少女像やペンギンなどのほかソラマメやネギボウズといった身近な野菜が多い。

乾漆技法はまず粘土（塑土）で大まかな像を作り、その表面に麻布を漆などを使って貼り重ね、固まった後に内部の粘土を取り除く。この張り子の像に木屑などを盛り付け、細部を整形するのが基本となる。脱乾漆と呼ばれる非常に古い技法で、興福寺の阿修羅像や唐招提寺の鑑真和上像などがその代表作だ。漆の堅牢さと非常に軽いのが特徴。その後張り子の像を木彫に置き換えた木心乾漆という技法にとつて代わられた。吉村のレリーフ作品はこの木心乾漆の技法を使っている。

吉村の最初の個展は二〇〇四年に前橋のギャラリー・スペースMで開かれたが、その後は県内だけでなく東京をはじめとして新潟や横浜などでも行っている。グループ展はさらに頻繁で、数え上げるだけでも大変だ。県内の美術館でも前橋の中之沢美術館、渋川市美術館、富岡市立美術博物館で複数回取り上げられている。

吉村が乾漆にこだわるのは、「張りのある柔らかな質感」があるからだ。ブロンズや石は冷たいし、木彫では素材の強さが際立つ。どこことなく土の香りのする乾漆は、吉村が表現したい生命の耀きに

相応しかったのだろう。吉村が色を塗ることに消極的なのも、作り物になるのを恐れているからだと思うられる。

共通するものと異なるもの

三人に共通するのは、生まれ故郷に戻り、そこで足場を固めた活動を展開していることだ。日本の美術界で一般的な公募団体には全く関心を示さず、マイペースで自分の制作に集中し、主に個展を発表の場としている。それでも県内の各美術館が注目し、取り上げられる機会が多いのは、その作品の質の高さがあるからだ。

三人の制作への動機が表現への個人的関心に拠っているのも共通している。社会的な出来事や美術界の動向というものに無関心だとは言わないが、社会に問いかけるようなテーマを大仰に取り上げたりはしない。

上野と牛嶋は分野的には同じ日本画だが、上野が日本画の顔料にこだわる典型的な日本画家なのに対して、牛嶋は顔料をエンプラシで吹き付けるという斬新な手法で制作する。

材料へのこだわりで言えば、上野は吉村に近いかも知れないが、色彩に魅了された上野と乾漆の土くれ感を大事にする吉村とは感覚的には大きく異なる。吉村の古風で素朴な味わいは独特で、アートと呼ぶより民芸に近いものがある。

それでも吉村のモチーフは過去にはなかった斬新さを見せており、現実にはあり得ない赤いアリを登場させる上野や、アクリル樹脂でモチーフを手作りする牛嶋同様、三人はまぎれもなく現代という時代に生きる表現者だ。

ヤマトギャラリーで開催される三人展は、令和四年度の企業メセナ群馬芸術文化奨励賞受賞者という縁で開催されるものだが、個々の芸術を鑑賞するだけでなく、芸術表現の多様性や作家の目指すものの相違にも、興味を持っていただけたらとない機会になるに違いない。

吉村浩美 HIROMI YOSHIMURA

略歴

- 1966 松井田町（現安中市）に生まれる
- 1996 東京学芸大学教育学部芸術課程美術科彫刻選修卒業
- 1999 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程文化財保存学専攻修了
- 2004 ギャラリー・スペースM（前橋）個展（以後多数）
中之沢美術館 第5回森の中の美術展
（以後同館の企画に度々出品）
- 2005 渋川市美術館・桑原巨守彫刻美術館
The rising generation ex
（以後同館の企画に度々出品）
- 2013 太田市金山交流センター 個展
- 2014 富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館
郷土の作家展（2016にも出品）

このほか、乾ギャラリー（赤坂・足利）、ギャラリー蔵織（新潟）、広瀬画廊（高崎）、ギャラリー空華（高崎）、ギャラリーSOL（銀座）など各地で個展。グループ展もまめぐら（安中）をはじめとして多数。



吉村浩美 立体：歩くペンギンI〜III レリーフ：sunny sky I〜III

深谷市血沼浄水場



埼玉県深谷市原郷

更新工事が完成

深谷市血沼浄水場の更新工事が令和5年3月に完了しました。建設プロダクトのヤマトは、急速ろ過装置の更新工事をはじめ、機械設備工事に携わらせていただきました。

血沼浄水場には、主に地下水が供給されており、また、一部泉水も使用されています。地下水は、次亜塩素酸ナトリウムによる滅菌や、溶解性マンガンなどを酸化させて、急速ろ過機で鉄やマンガンを取り除きます。

血沼浄水場の概要

供給地域 血沼区域
供給人口 約四万四千人(令和4年3月31日現在)
供給量 約二万二千m³/日(令和4年度平均)

深谷市内には5つの浄水場と5つの配水場があり、井戸や河川からの水をろ過や滅菌し、安全な水を配水池に貯水します。毎日約五万五千立方メートル(25メートルプール約140杯分)の水を市内のご家庭や事業所などに供給しています。



急速ろ過機



ポンプ室2



ポンプ室1

深谷市内 渋沢栄一ゆかりの地

旧渋沢邸中の家(なかんち)

渋沢栄一は天保11年(1840)深谷市の血洗島村(現在の深谷市)の農家で生まれました。幼い頃から家業である藍玉の製造・販売・養蚕を手伝っていました。中の家(なかんち)の主屋は、明治28年(1895)に栄一の妹夫妻によって渋沢栄一の生誕地に建てられました。資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一は、日夜多忙な日々を送っていました。が、帰郷した際にはこの地に立ち寄り、寝泊まりました。



渋沢栄一記念館

渋沢栄一に関する多くの資料が展示されています。本物そっくりの「渋沢栄一アンドロイド」があり、経済の講義を受けることができます。

所在地 深谷市下手計1204
(JR深谷駅からタクシーで約15分)
見学時間 午前9時〜午後5時
講義室(アンドロイド)は 午前9時30分〜午後4時
休館日 年末年始、臨時休館あり
利用料金 資料室・講義室の見学は無料
駐車場 有り(大型バス可)
問合せ 048-587-1100
(渋沢栄一記念館)



尾高惇忠生家

尾高は渋沢栄一の従兄で、学問の師でもあり、明治維新後は富岡製糸場の初代場長を務めました。この生家は、江戸時代後期に惇忠の曾祖父が建てたといわれ、惇忠や栄一らが高崎城乗っ取り計画を謀議したと伝わる部屋(非公開)があります。



所在地 深谷市下手計236
(JR深谷駅からタクシーで約15分)
見学時間 午前9時から午後5時
休館日 年末年始
入館料 無料
駐車場 有り(大型バス可)
問合せ 048-587-1100
(渋沢栄一記念館)



水質計器



計器盤



次亜貯留槽